



図2 円環的支援（DVの支援機能図を例に）

そのためには環境を構成している援助職（心理やワーカー等）が、法律家や教育者、行政職等との協働が欠かせないどころか、援助職の協働によって健全な社会的支援ネットワークを展開させることが究極の目標になるだろう。

## 8. 危機介入→後方支援→予防→危機介入とつづく円環的支援

前述の予防・危機介入・後方支援の3つの支援が、右回りに円環していることを表したものが図2である。ただし、これはDV（Domestic Violence；家庭内暴力）の被害者が、シェルター・コミュニティに3カ月間避難している間に発動し利用できる支援機能図である。まず、楕円の中はシェルター・コミュニティ内で行われる支援であり、1）緊急に安全な場を提供する機能、2）入所者と支援者が相互にエンパワメントし合う機能、3）入所者と支援者が自助グループを通して、新しい人生と人間関係を構築する機能である。このように、シェルター内でそれぞれの支援を受けながら、退所後はOG会として定期的集まり、相互に支援し合うことになる。一方、楕円の外に描かれている機能は、シェルターの外で行われるもので、原則シェルター退所前後に地域の関係機関や支援者と出会って、進めて行くものである。例えば、近隣の福祉事務所や保健所、精神科クリニック（walk-in-clinicなどの医療機関）、法テラスや弁護士や裁判所などと協働して行われる支援であり、基本的にはDV被害者等を支援するものだが、近隣のコミュニティに働きかけて、DV等が関係する事件を未然に防ぎ、自分たちのコミュニティを安全で棲みやすいものにするための支援にもなる。それがひいては、第二第三のDV被害者を出さない社会環境作りに繋がり、予防的機能を発揮することにもなるのである。



## 9. コンサルテーション (Consultation)

本書第9章で、箕口氏の詳細な記述があるので、ここでは臨床心理学の実践場面で行われるスーパービジョンとは異なり、コミュニティ心理学の独自性をもつ概念として復習しておく。まず、臨床心理学の実践においては、自分の関わっているケースについて、経験豊富な心理師等から、アドバイスや指導を受けるのがスーパービジョン (Supervision; SV) であり、読んで字の通り上からの視点で指導を受けることを言う。これに対して、コミュニティ心理学でのコンサルテーションの概念は、相談・協議・診察などの意味を持っており、コミュニティ心理学では重要な理念である。コミュニティ心理学で使われるコンサルテーションは、心理師同士の指導・被指導の話し合いと言うより、多職種と協議すると言う点から、協働の概念と同意義と考えるのが適切であろう。コンサルテーションを確立した Caplan は、建国当時のイスラエルで精神科医の不足から、さまざまな人びとと協議しながら患者を支えたという。これが正に、コミュニティ心理学でいうコンサルテーションであり、コミュニティにおける心理師の重要な関わりである。

## IV コミュニティ心理学的理念に基づくコミュニティ・アプローチの実際

さまざまな臨床現場において、クライアント個人に向けた心理的支援だけでなく、コミュニティを巻き込んだ支援がコミュニティ心理師に求められることが多い。そこで、個人情報に抵触しない形でアレンジしたDVの仮想事例を提示して、Ⅲ. で述べたコミュニティ心理学的理念に基づいて、コミュニティ・アプローチをどのように行ったかを具体例で述べる。

### 1. 仮想事例の提示

#### 1) 主訴

男性からの暴力の連鎖に悩む40歳代前半の独身女性 (Aさん)

#### 2) 来談された経緯

Aさんは、両親間の暴力が日常的に起っていた家庭で育ったが、18歳の大学入学を契機に親元を離れた。それから20年以上が経過して、母親が高齢になり要介護状態になり、同居を求められてしぶしぶ帰郷したが、母親の世話をしてい



るうちに、母の要求とは真逆の嫌がることをしたり、時には昔自分がされたように、母を罵倒したり暴力を振ったりして、自分の気持ちを押しさえられない毎日を過ごすようになった。「母に本当に酷いことをしている自分」と、事が終わってから自覚する自分に危惧感を抱き、都道府県の女性センターに相談して、筆者を紹介されて来談した。Aさんは、すらっとした長身の女性で、身だしなみも整っていて、母と二人暮らしで話すほど荒れた生活をしているとは感じさせない。遠隔地にいる弟さん一家は、母と姉に近寄らず、没交渉の状態を続けている。

### 3) 現在に至る経過

幼少時から両親間の暴力を見て育ち、怖い思いをして過ごしてきたが、Aさんが小学校に入学したところに、父親は失踪してゆく方知らずになり、母親と弟の三人暮らしになった。やっと母親に甘えたり、一緒に遊んだりしてくれるようになり嬉しかったが、そのうち自分の反抗期とも重なって、ことごとく母親に逆らい、その結果母親からの干渉や暴力を受けるようになり、母親との関係は酷く悪化した。18歳で親もとを離れ、好きな美術を学ぶために地方の大学に入り、卒後は公務員になり、美術は生かせなかったが、自活してまあまあの日々を過ごしていた。公務員時代には、男性との付き合いもあり、一時期は同棲もしたが、結局上手くいかず別れることになった。男性の身勝手さに何度も失望して、その頃付き合っていたストーカー的な男性から逃れるために親元に戻った。そこで、新しい仕事を見つけて、数年間可もなく不可もなくの生活を送っていた。ところが、母親がだんだん認知症気味になり、思い違いや頼んだことを忘れてしまうことが多くなって、今度は逆にAさんが母親に手を挙げるが多くなり、毎日が暴力の応酬になり、このままでは母と共倒れになるだろうと予測できたので、女性センターに相談して、筆者を紹介されて面接をすることになった。

## 2. コミュニティ心理学の基本的理念に則った支援の在り方

### 1) エンパワメントによる人と環境の適合

Aさんの家庭は、物心ついた頃から毎日暴力の飛び交う場で、〈父親から母親へ〉、〈母親からAさんへ〉、〈父親から弟へ〉、〈Aさんから弟へ〉と、信じ難い暴力連鎖の環境の中で育った。このような生活環境で育った子供は、親を信用できないので、常に距離を取って家庭内でも異邦人のように振る舞うか、暴力の相手を怒らせないように言いなりになるかであり、Aさんもこのような生活環境の中で、自分自身が何者かというCore（核）を持ってない人間として生きてきたよう



だ。そこで、筆者はフェミニスト・カウンセラーとして、自分の核を持たないまま生きてこざるを得なかったAさんの頑張りを認めていくこと、かつての加害者であった母親と一緒に住むという環境から距離を置くことの2点が、回復の第一歩と考えた。まず、彼女が過ぎてきた40余年の人生を振り返り、過酷な環境の中で、親元を離れたり求められて戻ったりした人生に、「Aさん、よく頑張ってきたわね！ 偉い！」の一言で、Aさんは泣き崩れてしまった。こうして、Aさんの家庭外では頑張れる良い面（大学をきちんと卒業して、公務員で働いてきた人生）に大いなる声援を送り、さまざまな面で傷ついてきた彼女と心理面接を開始し、ある程度落ち着いたところで、自助グループに繋がった。この自助グループは、DV被害者の3カ月の一時保護入所期間で、同じ被虐待経験（親から、配偶者からの）をもつ入所者同士が、過去を語り未来に向けて再出発しようとする自主管理的な傾向の強いグループである。一方、幼少時の母親からの虐待体験と年老いた母親へのリベンジ感情からくる虐待防止を図るために、送迎バスを利用して母親を昼間のデイケアに繋げて、夕方まで施設職員に見守ってもらうことを勧めた。これには母親が最初に抵抗を示したが、この体制を続けるうちに段々慣れてきて、デイケアを楽しめるようになり、これが結果的には母親へのエンパワメントになって、多少なりとも認知症の進行を遅らせることにもなった。

## 2) 当事者グループを基盤にした多職種との協働

こうして、Aさんは今まで母親の介護に取られていた時間を、Aさん自身の時間として有効活用するために、2週間に1回のカウンセリングと同じ被虐待環境で育ったシェルター仲間とのミーティングに毎週出席して、自助グループのメンバーとして、募る思いを涙と一緒に吐き出し、メンバーから多くの体験を聞いてもらい、自信をつけていった。母娘という最少単位のコミュニティから発生した虐待関係を、自助グループや他の当事者グループと繋がって、当事者の権利を擁護するアドボカシー機能に展開させたり、医療機関や公的な機関等とコラボしたり、協働の目標に向けて少しずつ運動したりも始まった。このような自助グループでの体験を通して、Aさんも母親も、それぞれに暴力の加害者であり被害者であったことを振り返り、同じ辛い体験をした仲間と繋がることで、Aさんたちもエンパワーされ、それが彼女たちを支えてきた仲間や環境をエンパワーすることにもなって、「人と環境の適合」に繋がったのである。なお、図2の支援機能図を見ると、危機介入でシェルターに入所した女性たちが、そこを基点に被害者仲間と繋がり、退所後の生活を視野に入れて、医（療）・職（業）・住（居）の確保のた



めに、〈DVを専門にする医療機関・福祉事務所・保健所・職業相談センター・宿所提供施設・母子寮・子供支援センター・法テラス（籍の移動や離婚手続き等）等の専門機関や専門職と少しずつ繋がって協働が実を結んでいくのである。

### 3) まとめに代えて

幼少時の親からの虐待，学校等での虐め・虐められ体験，恋人・パートナーからの IPV（Intimate Partner Violence）および DV 体験，職場でのパワハラ・セクハラなどのハラスメント，高齢者虐待など，私たちの人生には枚挙の暇がないほど多くの暴力による人権侵害が起こっている。そこで，人権侵害を防止するような積極的な施策が求められる。例えば，①各都道府県や市町村に，24 時間暴力防止ホットラインを設置する。②精神保健センターや女性センターで，DV や IPV 防止に関する講座やセミナーを開催する。③学校では，教員・生徒・PTA を巻き込んだ暴力防止セミナーを実施する。④教室の 4 層構造（森田の言う被害者・加害者・観客・傍観者の 4 層構造）の中で，特に傍観者への働きかけを行う。⑤職場におけるハラスメント防止研修など，コミュニティ心理学では，虐待・人権侵害などが起こる前の予防的働きかけ，すなわち前述の 8. 円環的支援が重要である。

#### ◆学習チェック表

- 1975 年にアメリカのオースティン会議で，コミュニティ心理学が誕生した背景が理解できた。
- コミュニティ心理学の基本理念の 9 つの内 6 つ以上が説明できる。
- コミュニティ心理学における円環的支援とはどういうものかが，具体的に DV 被害者支援で理解できた。
- 幼少時に始まり，高齢者になっても虐待が後を絶たないのは，どうしてかが理解できた。
- 当事者グループや自助グループの活動が，社会の変革を起こすことができるのは何故だろうか？

#### より深めるための推薦図書

山本和郎・原裕視・箕口雅博他（1995）臨床・コミュニティ心理学．ミネルヴァ書房．

植村勝彦・高島克子・箕口雅博他（2006，12）よくわかるコミュニティ心理学．ミネルヴァ書房．

植村勝彦編（2007）コミュニティ心理学入門．ナカニシヤ出版．

日本コミュニティ心理学会編（2007）コミュニティ心理学ハンドブック．東京大学出版会．



高島克子 (2011) 臨床心理学を学ぶ⑤—コミュニティ・アプローチ. 東京大学出版会.

文 献

- Caplan, G. (1964) *Principles of Preventive Psychiatry*. Basic Books. (新福尚武監訳 (1970) 予防精神医学. 朝倉書店.)
- Caplan, G. & Caplan, R. B. (2000) *Mental Health Consultation and Collaboration*. Waveland Press
- Dalton, J. H. Elias, M. J. & Wandersman, A. (2001) *Community Psychology: Linking Individuals and Community*. Thomson Learning. (笹尾敏明訳 (2007) コミュニティ心理学—個人とコミュニティを結ぶ 実践人間科学. トムソンラーニング.)
- Duffy, K. G. & Wong, F. Y. (1996) *Community Psychology*. Allyn & Bacon. (植村勝彦監訳 (1999) コミュニティ心理学—社会問題への理解と援助. ナカニシヤ出版.)
- Greene, G. J. et al. (2000) How to work with clients' strengths in crisis intervention: An solution-focused approach. In: Roberts, A. R. (Ed.) *Crisis Intervention Handbook: Assessment, Treatment, and Research*. Oxford University Press, pp.31-55.
- Hayes, R. L. (2001) カウンセリングにおけるコラボレーション. 東京大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 24; 108-113.
- 平川忠敏 (1997) コミュニティ心理学におけるエンパワメント研究の動向—エンパワメントの実践面から. コミュニティ心理学研究, 1(2); 161-167.
- Lewin, K. (1951) *Field Theory in Social Science*. Harper & Brothers. (猪俣佐登留訳 (1956) 社会科学における場の理論. 誠信書房.)
- 箕口雅博編 (2016) コミュニティ・アプローチの実践—連携と協働とアドラー心理学. 遠見書房.
- 村本邦子 (2006) 基本的発想8—エンパワメント. In: 植村勝彦・高島克子・箕口雅博・原裕視・久田満編: よくわかるコミュニティ心理学 (第2版). ミネルヴァ書房, pp.38-41.
- Patricia, J. M. & Robert, J. (Eds) (1994) *Reducing Risks for Mental Disorders: Frontier for Preventive Intervention Research*. National Academy Press.
- Rappaport, J. (1981) In praise of paradox; A social policy of empowerment over prevention. *American Journal of Community Psychology*, 9; 1-25.
- Sarason, S. B. (1974) *The Psychological Sense of Community: Prospects for a Community Psychology*. Jossey-Bass.
- 笹尾敏明・渡辺直登・池田満 (2007) コミュニティ心理学の誕生から現在まで. In: 日本コミュニティ心理学会編: コミュニティ心理学ハンドブック. 東京大学出版会, pp.4-20.
- Seaburn, D. B., Lorenz, A. D., Gunn, W. B. et al. (1996) *Models of Collaboration: A Guide for Mental Health Professionals Working with Health Care Practitioners*. Basic Books.
- 高島克子 (2011) コミュニティ・アプローチ. 東京大学出版会.
- 高島克子 (2016) 女性・子どもへの「暴力と貧困の連鎖」に対するコミュニティ・アプローチ. In: 箕口雅博編: コミュニティ・アプローチの実践—連携と協働とアドラー心理学. 遠見書房, pp.236-251.
- Winslow, C. E. (1920) The untilled fields of public health. *Science*, 51; 23-33.
- 山本和郎 (1986) コミュニティ心理学. 東京大学出版会.
- Zimmerman, M. A. & Rappaport, J. (1988) Citizen participation, perceived control and psychological empowerment. *American Journal of Community Psychology*, 16; 725-750.
- Zimmerman, M. A. (2000) Empowerment theory: Psychological organizational, and community levels of analysis. In: Rappaport, J. & Seidman, E. (Eds.): *Handbook of Community Psychology*. Springer, pp.43-63.